第24回病院図書室研究会総会および1999年度第1回研修会報告

田 引 淳 子*

清水市立病院図書館

I. はじめに

病院図書室研究会は活動事業の一環として、年2回の研修会を開催している。1997年度から教育研修役員を担当しているが、教育研修を担当するにあたり基本方針や要綱を作成し、担当としての意向を明確にすべきであると考えた。そこで1998年5月には基本方針として「変化するニーズに対応する新しい情報と処理能力を取得するように計画する」などの5項目を決めた。また教育研修マニュアルを作成し、教育研修の目的、教育研修グループの設置、実施内容などについて詳細な取り決めを行っている。教育研修の目的は、病院図書室研究会会員の生涯教育を通じ、資質の向上とコミュニケーションを図ることにある。この実施にあたり「参加者主体の活気ある研修会」を開催するように心掛け、企画を重視している。全国で数々の研修会が開催されているが、参加人数に適した企画があるはずであり、新しい研修手法を取り入れることも必要だと思う。あくまで、研修会開催者の自己満足に終わってはならない。参加者が主人公であることに主眼をおきたいと思っている。このため、研修会終了後は必ずアンケート調査を行い、参加者の意見を次の研修会に反映させるよう努力している。1997年度からは、

春には総会と1.5日の研修会・見学会を、秋には1日の研修会・見学会を行っている。今回は第24回総会と1999年度第1回研修会を開催した。

日 時：1999年4月15（木）～16日（金）

会 場：北とぴあ（東京都北区王子）

テーマ：病院図書館員の新たな役割
ー人的サービスへの拡大ー

参加者：52名（非会員を含む）

<プログラム>

4月15日（木）[第1日目]

9：30 開場・受付開始

10：00 第24回総会

12：00 昼食・休憩

13：00 開会の挨拶

13：05 特別講演「図書館員のこれからの仕事
ー新しい世紀に向けて」

日本図書館協会理事長：栗原均氏

14：00 「スライド作成指導の実際」

東芝病院図書室：栗原美穂子氏

15：30 グループ討議

A：相互貸借を円滑に行うには

B：雑誌の管理

C：図書室のパソコン管理

D：図書館員のこれからの仕事

E：インターネットの利用方法

F：看護文献の探し方

*Junko TABIKI：〒424-8636 清水市宮加三 1231.

(1999年6月30日 受理)

G：患者図書サービス

17：30 懇親会

4月16日（金）[第2日目]

9：15 グループ討議の発表

11：15 「利用指導の実際－オリエンテーションの方法－」

昭和大学烏山病院看護専門学校図書室：
和田佳代子氏

12：00 昼食・休憩

13：00 「レファレンスサービス」

東京医科大学図書館：高野史子氏

14：00 「Impact Factor による雑誌の選書」

ISI ジャパン：棚橋佳子氏

15：00 閉会

17：00 見学会 埼玉小児医療センター図書室
(見学会参加11名)

写真1. 特別講演をする栗原均氏

II. 研修会初日

15日午前の総会では、新規役員や予算の承認などが行われたあとで、近畿病院図書館協議会との共同事業について、インターネットプロジェクトと病院図書館員認定資格制度の検討を継続審議することが報告された。

午後からは研修会が開催された。病院図書館は相互貸借業務の急激な増大、洋雑誌の急騰と予算の削減、パソコン管理とインターネットの普及など、業務内容が変化している。今回は病院図書館員の新たな役割について、講演とグループ討議を行い、何をすべきかを検討した。

最初に、日本図書館協会理事長 栗原均氏は「図書館員のこれからの仕事」と題して特別講演を行った。昔の図書館は単に本を置く場所にすぎなかったが、現代では資料に対するアクセスが図書館の大きな仕事となっている。病院図書館でも、以前は利用者は医者だけであったが、現在では看

護婦や患者の家族へと広がりをみせ、患者も医学情報を獲得している。本を読む人を発見し、不読者層を発掘し、資料を提供するのが現代の図書館員の仕事であると述べられた。

次に、東芝病院図書館の栗原美穂子氏は「スライド作成の実際」と題してPower Pointによるスライド作成をオンスクリーンで詳細に説明した。利用者を指導するときは、1. 説明はゆっくり、2. 操作を理解できたかを一つずつ確認する、3. メモをとってもらうなどの注意点を付け加えた。参加者から「操作の実際を見ながら講義を受けることができよかった」という意見を聞くことができた。

次のグループ討議では研修会開催前にテーマごとに司会者を決め、参加者全員に資料や問題点を持ち寄るように連絡をしていた。

討議が始まる前に、会場の机を7テーブルに分ける準備を行い、討議の進行はテーブルごとの司会者に任せた。栗原均氏は「図書館員のこれからの仕事」のテーブルに参加し、図書館の基本は人である。病院図書館は公共図書館に置くべき医学書をアドバイスする機能を持つと良いのではないかという助言があった。また、病院図書館は閉じこもることなく公共図書館など他部門とのネットワークも広げ、利用者が利用しやすい図書館を目指すべきであるとも話された。

当初参加者は2時間もの間、何を話し合ったらよいのか不安そうであったが、事前に資料や問題点を用意するようにしたために、進行がスムーズで多くのことを話し合うことができた。翌日発表用の OHP シートや模造紙の作成などもあり、各テーブルは和気藹々と討議や発表準備が進んでいった。

Ⅲ. 研修会 2 日目

翌 16 日は、A から G のグループ討議の発表から始めた。発表は用意ができた順に挙手してもらい、比較的事務経験が浅い参加者が行うこととした。A グループの「相互貸借を円滑に行うために」は、洋雑誌の新しいものが手に入らない、所蔵館がわからない、出典を確認する、急ぎの FAX が多い、相手先によって時間がかかる、などの問題点と解決方法が話し合われた。B：「雑誌の管理」は、雑誌に関する業務に沿って話を進め、予算、和雑誌記事索引、保管スペース、目録のコンピュータ化、オンラインジャーナルなどについて問題点を出し合い、情報交換を行った。C：「図書室のパソコン管理」では、各図書室のパソコン利用の実情を紹介した後、パソコン管理の大前提となる入力作業から解放されるためには、書店から書誌データをフロッピーでもらったり、インターネット上の目録を利用するなど省力化の道を探ることで、省力化に繋がるとの意見が出た。D：「図書館員のこれからの仕事」では栗原均氏が加わり、1. 図書館の新設、移設に伴うレイアウトは利用者のアメニティーを優先させる。2. 人の問題では図書委員会の構成や、職員の適性と教育。3. 図書室の予算管理は、図書室の重要な仕事である。4. 図書室に来なくてもデータ利用できるように、PQD を院内 LAN で利用できるようにする、などを話し合った。E：「インターネットの利用方法」は検索やオンラインジャーナル、相互貸借に

写真 2. 活気あふれるグループ討議

インターネットでできることを話し合ったが、インターネットの使用により、合理化よりも可能性のひろがりを楽しみたいという結論になった。F：「看護文献の探し方」では効率的な方法の紹介をして、担当者が看護文献を探すときに困ったことを聞くとところが欲しいなどと発表した。G：「患者図書サービス」では実際に稼働している「はっぴい文庫」などの患者図書室について患者さんの心のケアも行うことについて苦労話なども交えて準備や運営方法などを話した。

グループ討議は、「話しやすく聞きやすい発表があったのがよかった」「他病院の現状をわかり合えて大変参考になった」「またグループ討議をやってほしい」などの意見が出て好評であった。

グループ討議が終了したあと、昭和大学付属烏山病院看護専門学校図書室の和田佳代子氏は利用指導の実際について話をされた。オリエンテーションの目的は利用者に図書室に足を向けさせることである。このためには利用者教育担当者の質の向上と維持が必要であると強調した。また、利用指導を行うときは対象をできるだけ少人数とし、何回も行うことが大切であり、利用者に合わせた指導方法をとらなければならないと述べた。また、看護文献の検索は、医学中央雑誌と MEDLINE だけでは不足なので、他の二次資料も使用して検索したほうがよいと付け加えられた。

午後からは東京医科大学図書館の高野史子氏が「レファレンスサービス」について講演された。レファレンスには情報をキャッチするセンスや感覚が必要であり、今何を聞かれるか、常にアンテナを張っているとよい。また、津田良成先生のお話を紹介して、医学図書館員は医者が生涯をかけて勉強していることをサポートするのだから、医者に信頼してもらうためには、医学図書館員は自分で勉強しなければならないと教えていただいた。また、根拠のある情報を使うために、EBMを紹介し、量から質を重視する時代であることを実感させられた。

最後の講演はISI ジャパンの棚橋佳子氏による「Impact Factor による雑誌の選書について」であった。Impact Factor（文献引用影響率）は雑誌の影響度、重要度を表す指標である。雑誌を選書するときに Impact Factor が参考になるが、総被引用回数、論文総数、最新文献指標、被引用半減期をまとめた Journal Citation Report（JCR）を使用し、雑誌の動向を多角的に分析し、客観的に判断したほうがよいとの見解が述べられた。

病院図書館員の新たな役割について、これらの講演とグループ討議が行われ、新しい時代に向けて病院図書室の人的サービスの重要性と、病院図書館員の勉強の必要性を確認して研修会は無事に終了した。

研修会の後、埼玉小児医療センター図書室の視学会が行われた。当図書室は250㎡で単行書

7,805冊、製本雑誌8,567冊、和雑誌92種、洋雑誌150種を所蔵している。当センターは1998年に改築されたのを機に図書室も改築された。建築段階から司書が参加し、細部にわたって工夫がされている。機能的で美しい図書室はプランニングの成功例として参考になった。

IV. おわりに

今回の研修では、栗原均氏は講演からグループ討議、そして懇親会にまで参加していただき、温かいお人柄で図書館のこれからの仕事について指導をして下さった。また、その他の講師の方々にも、わかりやすい講演や講義をしていただいた。

参加者は今回も北海道から沖縄まで全国から集まり、中でも病院図書室研究会のホームページを見て鹿児島市から急遽参加した女医さんもあり、多彩な顔触れが揃ったの研修であった。また、グループ討議では、各テーブルの司会者と発表者が奮闘して、充実した発表を聞くことができた。この発表経験を生かし、色々な研修会で発表経験をさらに積んでいきたいと願っている。研修会終了後のアンケートでは、「実務に役立つものばかりでよかった」「司書としての誇りをもって明日からの実務に励みたい」「情報交換の場としてもためになる」などの意見が出された。多くの方々のご協力により、研修会が盛会のうちに終了できたことを感謝します。